

## 釈尊の「四つの聖なる真理」の説法の真意について

銚之原 善章

### The True Meaning of the Preaching by Sakyamuni about 'the Four Holy Truths'

Yoshinori Hokonohara

This paper is investigating the true meaning of the preaching by Sakyamuni about 'The Four Holy Truths (cattāri ariyasaccāni)' which is the most important preaching for his Buddhism.

The conclusion is as follows; he does not talk in the preaching about the four true propositions of suffering, the cause of suffering, the extinction of suffering and the way to the extinction of suffering as the conventional dominant interpretation asserts. Instead, his preaching talks about the two origin theories of his Buddhism; (1) All things are The Holy Truth, (2) The way through which a person penetrates this is concentration(samādhi).

#### はじめに

釈尊の「四つの聖なる真理」(cattāri ariyasaccāni 「四聖諦」)の説法は、釈尊の最初の説法(「初転法輪」)とされるものの内容にもなっており、したがって、釈尊の仏教の根本説を説いているものと考えられ、極めて重要なものである。しかし、この説法についての定説的な理解は、筆者の見るところでは、極めて問題적であると考えられる。そこで、この論考では、釈尊の「四つの聖なる真理」の説法の真意をこれに抗して明らかにし、そのことによって、さらに、釈尊の仏教の根本説を明らかにするということを試みたい。

#### 1. 「四つの聖なる真理」の説法の差し当たりの理解

##### (1) この説法とその内容

「四つの聖なる真理」の説法は、パーリ語原始経典「五部」(Panca-nikāya)では、その多くが、「相応部」(Saṃyutta-nikāya 7762 経)中の「真理相応」(Saccasaṃyutta Pali Text Society による Saṃyutta-nikāya の vol.5 414-478p. 全 131 経)に集められている。ただし、この 131 経中の第 50 から第 60 までの経は第 49 の経と、さらに、第 62 から第 131 までの経は第 61 の経とその中心部分が全く同じであるので、これらの経を除くとするならば、「真理相応」の中心的な経は 50 経ということになる。そこで、これらの経によってこの説法がいかなることを説くものであるかを考察することにする。このために、まず、これらの中からこの説法の典型的なものを挙げることにする。

---

\* 教養部

「比丘達よ、四つの聖なる真理がある。いかなる四つのものが、であろうか。苦という聖なる真理が(dukkham ariyasaccam)、苦の起因という聖なる真理が(dukkhasamudayam ariyasaccam)、苦の滅という聖なる真理(dukkhanirodham ariyasaccam)が、苦の滅に導く道という聖なる真理が(dukkhanirodhagāminī paṭipadā ariyasaccam)、である。

比丘達よ、如来は、実にこれら四つの聖なる真理を如実に現等覚したことによって(yathābhūtam abhisambuddhattā)、応供(araham)、正等覚者(sammāsambuddho)と呼ばれるのである。

それ故に、比丘達よ、『苦はこれである』と相応がなされるべきであり(Idaṃ dukkhanti yogo karaṇīyo)、『苦の起因はこれである』(Ayaṃ dukkhasamudayo)と相応がなされるべきであり、『苦の滅はこれである』(Ayaṃ dukkhanirodho)と相応がなされるべきであり、『苦の滅に導く道はこれである』(Ayaṃ dukkhanirodhagāminī paṭipadā)と相応がなされるべきである。」(S.N.vol.5, 433 「真理相応 第 23 正等覚者」)

この説法は三つの段落から成っており、各段落は次のことを述べている。

- (i) 「苦という聖なる真理」、「苦の起因という聖なる真理」、「苦の滅という聖なる真理」、「苦の滅に導く道という聖なる真理」という「四つの聖なる真理」がある。
- (ii) これら「四つの聖なる真理」を如実に現等覚した者が「応供」或いは「正等覚者」である。
- (iii) 「苦」、「苦の起因」、「苦の滅」、及び「苦の滅に導く道」をそれぞれ「これ」として如実に現等覚するところの相応（ヨーガ）がなされるべきである。

## (2) 説法内容の理解

これらのうち、まず、(i)の「苦という聖なる真理」等の「四つの聖なる真理」があるということは、「苦」等の四つのものはそれぞれ「聖なる真理」であるということの意味するであろう。次の説法の言葉は、これら「苦」以下の四つのものが「聖なる真理」であるということ「真理」の同義語の「真如」、「不離真如」、「不異真如」という語でもって明確に述べているものである。

「比丘達よ、四つの聖なる真理がある。いかなる四つのものが、であろうか。苦という聖なる真理が、苦の起因という聖なる真理が、苦の滅という聖なる真理が、苦の滅に導く道という聖なる真理が、である。比丘達よ、実にこれらの四つの聖なる真理は真如(tathāni)、不離真如(avita-thāni)、不異真如(anaññathāni)であり、それ故に、聖なる真理と呼ばれるのである。」(S.N.vol.5, 435 「真理相応 第 27 真如」)

かくして、説法内容(i)は、次の(i)´に置き換えることができるであろう。

- (i)´ 「苦、苦の起因、苦の滅、及び苦の滅に導く道という四つのものは聖なる真理である。」

「真理相応」の主要 50 経中でこのことを直接に説いている経の数は 16 経である。

次に、(ii)は、「応供（阿羅漢）」或いは「正等覚者」に成ることは、「苦」、「苦の起因」、「苦の滅」、及び「苦の滅に導く道」という四つの聖なる真理を現等覚する、すなわち、さとることによって可能になるということを言っている。しかるに、「応供（阿羅漢）」或いは「正等覚者」に成ることは仏道修行(brahmachariya 梵行)の目的とされることである。(注 1) したがって、この(ii)は、仏道修行の目的はこれら四つの聖なる真理をさとることであるということと言っていると見なすことができるであろう。このことは、実際、「真理相応」の第 3～6 の経で特に明確な仕方で行われていることである。例えば、第 3 の経では、次のように行われている。

「比丘達よ、過去世において正しく家を出て出家した善男子は、誰でも全て、実に四つの聖なる真理の如実なる現観のために(yathābhūtam abhisamayāyā) そうしたのである。(以下、「未来世」、「現在」についても同様のことが行われている。)」(S.N.vol.5, 415 「真理相応 第 3 善男子」)

「真理相応」の主要 50 経中で、このように仏道修行の目的が四つの聖なる真理をさとることであることを説く経の数は 28 経である。この場合の「さとる」を表すために用いられている語は、「現等覚する」(abhisambujjhati) (4 経) の他に、「証智する」(pajānāti)(8 経)、「現観する」

(abhisameti) (7 経)、「見る」(dassati) (4 経) 等である。ここでは「さとり」を表す最も一般的な語である ‘pajānāti’ (< pa- 現前に + jānāti 知る> paññā 般若、智慧、訳語 ; 「証智する」) を用いることにする。かくして、説法内容(ii)は、次の(ii)´に置き換えることができるであろう。

(ii)´ 「仏道修業の目的は、苦、苦の起因、苦の滅、及び苦の滅に導く道という四つの聖なる真理を証智することである。」

しかし、この(ii)´は、(i)´から派生することである。何故なら、「苦」以下の四つのものがそれぞれ「聖なる真理」であるとするならば、当然、仏道修業の目的はこれら四つの聖なる真理を証智することになるからである。よって、(ii)´は(i)´に帰着せしめることができるであろう。以上から、最初の二つの段落の説法内容は、根本的には次のことであると言えよう。

(I) 「苦、苦の起因、苦の滅、苦の滅に導く道という四つのものは聖なる真理である。」

さらに、(iii)は「四つの聖なる真理」の説法の殆どのもの(主要 50 経中の 45 経)において、しかも多くの場合定型的な型式で説かれていることである。この場合の「これ」(指示代名詞 *imaṃ* の中性形 : *Idaṃ*、男性形及び女性形 : *Ayaṃ*。定型的な型式では、先頭の文字が常に大文字で表わされている)は、四つのものがそれぞれまさにそれであるところの「聖なる真理」を指し示していると解せられる。そうするならば、(iii)は、苦以下の四つのものを聖なる真理と如実に証智するところの相応(ヨーガ)がなさるべきであるということを言っていることになる。そして、このことは、「苦、苦の起因、苦の滅、苦の滅に導く道という四つのものを聖なる真理と証智する道は相応である」ということを前提とし、このことを間接的に述べていると解することができるであろう。

しかし、この場合の「相応」(yoga)とは何であろうか。それは「調息などの方法によって心を一点に集中し、止と観とを主とする観行を修して正理と相応し冥合一致すること」(『仏教学辞典』法蔵館)である。ここで「止」(*samatha*)とは「定に七名ある中の一。動心を静息し煩惱を滅止し、心を一處に定止せしむること。」(『佛教辞典』大東出版社)である。すなわち、「止」とは「三昧」(*samādhi* 定)のことであり、何か或る一つの事柄に心を集中させることである。「相応」はこのような三昧或いは定であるが、さらに、この三昧においては、辞典の説明文にもあるように、その集中した事柄を突き抜けて、そのものと一切のものととの如実相たる「真理」(*sacca*)と相応し結合し(*yuñjati* < *yoga*)、その「真理」を観るということが起こるのである。すなわち、三昧においては「観」(*vipassana*)が生じるのである。「相応」はこのような止観行であるが、この場合止と観とは別異ではないが故に、それは単に「止」、すなわち、「三昧(定)」であると言ってもよいであろう。すなわち、「相応」とは、何らかの個物に集中することを通じて、そのものと一切のものととの如実相たる「真理」に相応し、それと結合する行であるということができよう。次の説法は、「身」、「諸受」、「心」、「諸法」に心を集中させることによって、これらのものが遍知され(完全知され)、その如実相たる「不死」(=「真理」)が証智されるということを説いているものである。これはまさにこのような「相応」を説いているものと解することができるであろう。

「わが比丘達よ、四念現住(*cattāro satipaṭṭhānā*「四念処」)がある。いかなるものが四念現住であろうか。比丘達よ、ここに比丘が身(*kāya*)を観じ、熱心、正智、具念にして、世間の食欲憂悩を調伏して身の内に住している。身を観じて身の内に住する時、彼には身が遍知されている(*pariññato hoti*)のであり、身が遍知されていることによって不死(*amatam*)が真証されている(*sacchikatam hoti*)のである。諸受(*vedanā*)を観じ……。心(*citta*)を観じ……。諸法(*dhammā*)を観じ……」(S.N.vol.5, 182, 「念現住相応 第38」)

以上から、説法内容(iii)は、次の(iii)´に帰着させることができるであろう。

(iii)´ 「苦、苦の起因、苦の滅、苦の滅に導く道という四つのものを聖なる真理と証智する道

は三昧である。」

このことは、「真理相応」の最初の経において、次のように強調して説かれているのである。

「比丘達よ、三昧を修習せよ。比丘達よ、三昧に入った比丘は如実に証智する。何を如実に証智するのであろうか。『苦はこれである』と如実に証智し、・・・『苦の滅に導く道はこれである』と如実に証智するのである。比丘達よ、三昧を修習せよ。比丘達よ、三昧に入った比丘は如実に証智する。それ故に、比丘達よ、『苦はこれである』と相応がなされるべきであり、・・・『苦の滅に導く道はこれである』と相応がなされるべきである。」（S.N.vol.5, 414 「真理相応 第1 三昧」）

こうして、最初に挙げた「四つの聖なる真理」の説法の典型例が説いていることは、差し当たり、根本的には次のことであると解せられる。

（Ⅰ）「苦、苦の起因、苦の滅、苦の滅に導く道という四つのものは聖なる真理である。」

（Ⅱ）「苦、苦の起因、苦の滅、苦の滅に導く道という四つのものを聖なる真理と証智する道は三昧である。」

そして、「四つの聖なる真理」説法集とも言うべき「真理相応」の他の全ての経においても、説法内容としてこれら二つのこと以外のことを見出されないのである。この説法は根本的にはこれら二つのことを説くものなのである。そこで、「真理相応」の主要 50 経について、どれほどの経が上記（Ⅰ）或いは（Ⅱ）を説いているかを調べてみると、その結果は次の通りである。

- ・（Ⅰ）を説いているもの：43 経〔うち、（Ⅰ）のみを説いているもの：6 経〕
- ・（Ⅱ）を説いているもの：44 経〔うち、（Ⅱ）のみを説いているもの：7 経〕
- ・（Ⅰ）と（Ⅱ）の両方を説いているもの：37 経〔うち、上記（Ⅰ）<sup>1</sup> +（Ⅱ）<sup>2</sup> +（Ⅲ）<sup>3</sup>：1 経（上掲「典型例」）、（Ⅰ）<sup>1</sup> +（Ⅲ）<sup>3</sup>：13 経、（Ⅱ）<sup>2</sup> +（Ⅲ）<sup>3</sup>：23 経〕

## 2. 「四つの聖なる真理」の説法の定説的理解

### （1）この説法の定説的理解

以上の通り、「四つの聖なる真理」の説法は、差し当たり、「苦、苦の起因、苦の滅、苦の滅に導く道という四つのものは聖なる真理である」と、「そのことを証智する道は三昧である」とを説くものであると解せられる。しかるに、仏教学の定説では、この説法における「四つの聖なる真理」は、次の例に見られるように、四つのものに関する四つの真なる命題（或いは、判断）であるとされ、この説法はこの四つの真なる命題を説くものであると解せられているのである。

「神聖な真理が四つあるから合せて四聖諦という。すなわち、第一には、迷いの生にあってはすべては苦しみである、という真理で、これを苦聖諦という。第二には、その苦しみを集め起こすところの原因は無明（仏教真理の無自覚）と渴愛（求めて飽くなき我欲）とである、という真理で、これを苦集聖諦という。第三には、その苦しみの滅した境地こそがさとりの世界である、という真理で、これを苦滅聖諦という。第四には、その覚りの世界に至るのには八聖道に従って正しい生活をしなければならない、という真理で、これを苦滅道聖諦という。」（山口益他著『仏教学序説』平楽寺書店 103 頁）

すなわち、これによると、「四聖諦（四つの聖なる真理）」とは、おおよそ次のような四つの真なる命題であるとされているのである。

- ①「一切は苦である。」 ②「苦の原因は無明と渴愛である。」 ③「苦が滅した境地が悟りの世界である。」 ④「悟りの世界に至る道は八聖道である。」

この説法における「四つの聖なる真理」がこのように理解されることの根拠は何であろうか。それは、次のような釈尊の説法であるようである。これは、悟りを開いた釈尊が初めて行った説法（「初転法輪」）とされるものの一部である。



「しかし、比丘達よ、苦という聖なる真理はこれである。生も苦であり、老も苦であり、病も苦であり、死も苦であり、愁、悲、苦、憂、悶も苦であり、怨憎する者達に会うことも苦であり、愛する者達と別離することも苦であり、求めて得られないことも苦である。要するに、五取蘊（pañcupādānakkhandhā 取著された五蘊）は苦である。しかし、比丘達よ、苦の起因という聖なる真理はこれである。再生するものであり、歓喜と貪欲を伴い、ここかしこで歓喜するところの渴愛、即ち、欲愛、有愛、無有愛はこれである。しかし、比丘達よ、苦の滅という聖なる真理はこれである。この渴愛の余すところなき離・滅、捨棄、捨離、解脱、無執着であるところのものは。しかるに、比丘達よ、苦の滅に導く道という聖なる真理はこれである。まさに八聖道、即ち、正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定はこれである。」（S.N.vol.5, 421-2「真理相応 第11 如来所説」）

この説法は、一見して上記のような四つの命題を説いているようには見えないであろう。しかし、これは、次の訳例にも見られるように、この説法の訳にこれらの命題が言わば訳し込まれて、それらの四つの命題を説いていると解されるものようである。

「比丘らよ、生も苦である、老も苦である、病も苦である、死も苦である、怨憎（ニク）い人びとと会うのも（怨憎会）も苦である、可愛い人びとと離れるのも（愛別離）苦であり、求めるものを得ないことも（求不得）苦である、要するに、取著ある心身環境（五取蘊）は苦である、というのが苦に関する神聖なる真理（苦聖諦）である。次に、比丘らよ、輪廻再生に導き、喜びと貪りを伴い、いたるところで喜び楽しもうとする熱愛欲求（渴愛）—欲愛・有愛・無有愛—なるものは〔苦の集（原因）であるというのが〕、苦の生起の原因に関する神聖なる真理（苦集聖諦）である。次に、比丘らよ、上の熱愛欲求（渴愛）を残りに離れ滅し、捨て遣（やり）、脱して無執着となることは〔真の理想目的であるというのが〕、苦の滅に関する神聖なる真理（苦滅聖諦）である。次に、比丘らよ、正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定という、この八つの部分から成る神聖なる道（八支聖道）こそ〔理想達成の方法であるというのが〕、苦の滅にいたる道に関する神聖なる真理（苦滅道聖諦）である。」（水野弘元著『仏教要語の基礎知識』春秋社 1972 176-7 頁）（注；下線は筆者によるもので、問題的と考えられる箇所を示すものである。）

このように、この説法は、多くの言葉を補足したり、「苦という神聖なる真理」と訳すべき言葉を「苦に関する神聖なる真理」と訳したりなどして、上記の四つの命題を説いているとされるのである。しかし、この説法を素直に理解する限り、これが説いていることは、次のことである。  
[1] 生苦、老苦、病苦、死苦等々の苦という聖なる真理はこれである。 [2] 渴愛がそれであるところの苦の起因という聖なる真理はこれである。 [3] 渴愛の余すところなき離・滅・捨棄・捨離、解脱、無執着であるところの苦の滅という聖なる真理はこれである。 [4] 八聖道、即ち、正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定がそれであるところの苦の滅に導く道という聖なる真理はこれである。

このことは、この説法が、上掲の言葉に続けてさらに次のように説いていることから明らかであろう。

「苦という聖なる真理はこれである（Idaṃ dukkham ariyasacca）と、比丘達よ、かつて聞いたことの無い諸法に対して、私には眼（cakkhu）が生じ、智（ñāṇa）が生じ、智慧（pañña）が生じ、明（vijjā）が生じ、光明（āloka）が生じたのである。」（S.N.vol.5, 422）〔この後、「苦の起因」、「苦の滅」、「苦の滅に導く道」についてもこれと全く同じことが言われている。〕

要するに、この釈尊の最初の説法は、中心的には、上記[1]～[4]の四つのことを説いているのである。これは、この言葉からも窺われるように、釈尊の悟りの根本経験を述べたものである。

「これ」とはまさにその経験において経験された、現前する「聖なる真理」そのものを指していると考えられる。「四つの聖なる真理」説法集である「真理相応」では、その殆どの経において、

「・・・はこれである」という表現が見られる。このことは、「・・・はこれである」ということが「四つの聖なる真理」の説法が説く中心的なことであるということを示しているであろう。

## (2) この説法の定説的理解の問題性

上記の訳では、‘*dukkham ariyasaccam*’は、「苦に関する神聖なる真理」と訳され、この真理は、苦に関する一つの真なる命題（「迷いの生にあってはすべては苦しみである」）のことであるとされている。また、‘*dukkhasamudayam ariyasaccam*’は、「苦の生起の原因に関する神聖なる真理」と訳され、この真理は、苦の起因に関する一つの真なる命題（「苦しみを集め起こすところの原因は無明と渴愛とである」）のことであるとされている。さらに、‘*dukkhanirodham ariyasaccam*’は、「苦の滅に関する神聖なる真理」と訳され、この真理は苦の滅に関する一つの真なる命題（「苦しみの滅した境地こそがさとりの世界である」）のことであるとされている。さらに、また、‘*dukkhanirodhagāminī paṭipadā ariyasaccam*’は「苦の滅にいたる道に関する神聖なる真理」と訳され、この真理は、同様に、苦の滅にいたる道に関する一つの真なる命題（「覚りの世界に至るのには八聖道に従って正しい生活をしなければならない」）のことであるとされている。

しかし、‘*dukkham ariyasaccam*’は、‘*dukkham*’と‘*ariyasaccam*’とは同格（共に主格）であるから、「苦という聖なる真理」と訳されなければならない。同様に、‘*dukkhasamudayam ariyasaccam*’は「苦の起因という聖なる真理」と、‘*dukkhanirodham ariyasaccam*’は「苦の滅という聖なる真理」と、‘*dukkhanirodhagāminī paṭipadā ariyasaccam*’は「苦の滅にいたる道という聖なる真理」と訳されなければならないのである。すなわち、「苦」、「苦の起因」、「苦の滅」、「苦の滅に導く道」がただちに「聖なる真理」と言われているのである。上記のような四つの命題は「四つの聖なる真理」の説法のどこにも直接には説かれていないのである。これらの四つのものがただちに「聖なる真理」とされていることは、次の説法でも明らかである。

「比丘よ、苦を、私によって教示された第一の聖なる真理であると、そのように受持せよ。比丘よ、苦の起因を、私によって教示された第二の聖なる真理であると、そのように受持せよ。比丘よ、苦の滅を、私によって教示された第三の聖なる真理であると、そのように受持せよ。比丘よ、苦の滅に導く道を、私によって教示された第四の聖なる真理であると、そのように受持せよ。」(S.N.vol.5, 427「真理相応 第15 受持」)

しかし、そもそも、「苦」、「苦の起因」、「苦の滅」、「苦の滅に導く道」が直ちに「聖なる真理」であるということはいかなることであろうか。

## 3. 「四つの聖なる真理」の説法の真意

### (1) 「四つのもの」の真意

「四つの聖なる真理」の説法は、中心的には、「苦、苦の起因、苦の滅、苦の滅に導く道という四つのものは聖なる真理である」ということを説くものであった。これらの四つのものは、それらが聖なる真理であると言われている限りは、特別なものなのであろうか。確かに、苦の超克を目指す仏教においてこれらは最も関心が持たれるものであるから、その意味ではこれらは特別なものであろう。しかし、この説法が説こうとしていることにおいてもこれらは特別なものであろうか。すなわち、これら四つのもののみが聖なる真理なのであろうか。

「四つの聖なる真理」の説法では、これら四つのものは聖なる真理であるが故に、これらを証智すべきであるということが説かれていた。しかし、「相応部經典」等の原始經典中には、苦以外の様々な物について、物、物の起因、物の滅、物の滅に導く道それぞれの証智を説く多くの経が存しているのである。さらに、これらの四つの形式を離れて、単に任意の物についてそれらの証知、遍知（完全知）を説く経もまた多く存しているのである。そこで、以下、これらの例を見ることによって、「四つのもの」の意味を探ることにする。

## (i) 「物」、「物の起因」、「物の滅」、及び「物の滅に導く道」の証智を説く説法の真意

「四つの聖なる真理」の説法は、「苦」、「苦の起因」、「苦の滅」、「苦の滅に導く道」という四つのものは聖なる真理であるが故に、これらを証智すべきであるということを説くものであった。しかし、実は、この説法以外の説法では、「苦」から離れて、任意の物について、「物」、「物の起因」、「物の滅」、及び「物の滅に導く道」の証智を説くものも多く存しているのである。これらの説法の例を以下挙げることにする。

「比丘達よ、老死を証智し、老死の起因を証智し、老死の滅を証智し、老死の滅に導く道を証智し、生を証智し・・・、有を証智し・・・、取著を証智し・・・、渴愛を証智し・・・、受を証智し・・・、触を証智し・・・、六処を証智し・・・、名色を証智し・・・、識を証智し・・・、行を証智し、行の起因を証智し、行の滅を証智し、行の滅に導く道を証智しているいかなる沙門達或いは婆羅門達も、わが比丘達よ、沙門においては真正の沙門であり、婆羅門においては真正の婆羅門なのである。また、彼ら尊者達は沙門の義(attha)或いは婆羅門の義を現法において(*ditthe dhamme* 見られた法=現象において) 自ら証知し(*abhiññā < abhijānāti*)、真証し(*sacchikatvā < sacchikaroti < sacca* 真理+ *karoti* 為す)、得達して(*upasampajja < upasampajjati* 到達・獲得・具足する)、住しているのである。」(S.N.vol.2, 14-5「因縁相応 第13 沙門・婆羅門」)

これはいわゆる「十二縁起」の説法の一つである。ここでは、この説法に登場する十二の物の内、「無明」を除く十一の物について、その物、物の起因、物の滅、物の滅に導く道を証智すべきことが説かれ、これらを証智している沙門或いは婆羅門こそが真正の沙門或いは婆羅門であると言われている。そして、さらに、沙門或いは婆羅門がこれらのものを証智することは、沙門或いは婆羅門の存在意義であるところのものを、すなわち、「聖なる真理」を、現象において証知し、真証することであるということが言われている。ここでも、はっきりと、物を証智することは、物の如実相である「真理」を証知し、真証することであるということが言われているのである。同様の説法をもう一つ挙げる。

「比丘よ、ここに多聞の聖弟子が、色を証智しており、色の起因を証智しており、色の滅を証智しており、色の滅に導く道を証智しており、受を・・・想を・・・行を・・・識を証智しており、識の起因を証智しており、識の滅を証智しており、識の滅に導く道を証智している。これが、比丘達よ、明(*vijjā* 智)と言われるのであり、また、この限りで明者(*vijjāgata*)はあるのである。」(S.N.vol.3, 163「蘊相応 第114 明」)

ここでは、「智慧の宗教」と言われる仏教が目標とする「智慧」(*paññā*)の別名である「明」(*vijjā* 智)は、万物を構成する五つの基本要素とされる「五蘊」の各々に関して、そのものの証智、そのものの起因の証智、そのものの滅の証智、そのものの滅に導く道の証智であるとされている。「五蘊」は、一切のものを構成する五つの基本要素を意味すると共に、それらによって構成されている一切のものをも意味するのであるから、この説法によって釈尊は、「明」として、一切のものの証智を説いていることになる。これに対して、「四つの聖なる真理」の説法では、この「明」は次のように説かれているのである。

「比丘よ、苦に対する智(*dukkhe ñāṇaṃ*)、苦の起因に対する智、苦の滅に対する智、苦の滅に導く道に対する智、これが、比丘よ、明と言われるのであり、この限りで明者はあるのである。」(S.N.vol.5, 429-30「真理相応 第18 明」)

ここでは、釈尊は、「明」として、「苦」、「苦の起因」、「苦の滅」、「苦の滅に導く道」それぞれの智を説いているのである。このことは、「苦」以下の四つのものは、一切のものの代表であり、一切のものを表し、意味していることを示しているであろう。

以上から、「物」、「物の起因」、「物の滅」、及び「物の滅に導く道」の証智を説く説法は、一切のものの証智を説き、さらに、そのことでもって「一切のものは聖なる真理である」ということ

を説くものであると解せられる。

## (ii) 物の証知或いは遍知を説く説法の真意

さらに、「物」、「物の起因」、「物の滅」、「物の滅に導く道」という四つの形式を離れて、任意の物について、物の証知(abhiññā < abhijānāti < abhi- 勝れた仕方で + jānāti 知る)、あるいは遍知(pariññā < parijānāti < pari- 遍く、完全に + jānāti 知る)を説く説法もまた多く存しているのである。その例を以下挙げる。

「比丘達よ、遍知されるべき諸法(pariññeyye dhamme)と遍知とを説こう。これを聞け。比丘達よ、いかなるものが遍知されるべき諸法であろうか。比丘達よ、色が遍知されるべき法であり、受が遍知されるべき法であり、想が遍知されるべき法であり、行が遍知されるべき法であり、識が遍知されるべき法である。これらが、比丘達よ、遍知されるべき諸法と言われるのである。比丘達よ、いかなるものが遍知であろうか。食欲の滅尽、瞋恚の滅尽、愚痴の滅尽(rāgakkhayo dosakkhayo mohakkhayo)、これが、比丘達よ、遍知と言われるのである。」(S.N.vol.3, 26, 「蘊相応 第24」)

ここで、釈尊は、色、受、想、行、識の五蘊を遍知すべきことを説いている。ということは、五蘊、すなわち、一切のもの、は「聖なる真理」であるということの意味するのである。さらに、事物の遍知が「食欲の滅尽、瞋恚の滅尽、愚痴の滅尽」であると言われている。これは、「真理」や「涅槃」についてしばしば言われる言葉である。したがって、物の遍知＝「聖なる真理」ということが言われていることになる。このことは、物の遍知は、上述のように、そのことを通じてさらに「聖なる真理」を証知し、真証することであり、そして、このことは、ヨーガ或いは三昧によって「聖なる真理」と結合し相応し、そのものになってそのものを知ることであるということを示している。すなわち、物の遍知は、「聖なる真理」の証知であると共に、「聖なる真理」そのものなのである。

以上から、任意の物の証知或いは遍知を説く説法も「一切のものは聖なる真理である」ということを説くものである。

## (iii) 「四つのもの」の真意

「四つの聖なる真理」の説法では、「苦、苦の起因、苦の滅、苦の滅に導く道」という四つのは聖なる真理である」ということが説かれ、したがって、また、これら四つのもを証智すべきことが説かれていた。しかるに、以上の(i)及び(ii)で見たように、これら四つものから離れてあらゆるものについても、それらを証智すべきことが説かれていた。ということは、これらの説法では、これら四つもののみならず、あらゆるものが聖なる真理であるということが説かれていることになるのである。そうするならば、「四つの聖なる真理」の説法における「苦」、「苦の起因」、「苦の滅」、「苦の滅に導く道」という四つのは、他の任意の物によって代えることもできるのであり、何らの特別なものでもないということになる。この説法におけるこれら四つのは一切のものを代表し、一切のものを意味しているのである。そうするならば、この説法が説く、「苦、苦の起因、苦の滅、苦の滅に導く道」という四つのは聖なる真理である」は、「一切のものは聖なる真理である」を意味することになるのである。「四つの聖なる真理」の説法は中心的にはまさにこのことを説くものであると考えられる。

## (2) 「聖なる真理」の真意

以上のように、「四つの聖なる真理」の説法は「一切のものは聖なる真理である」ということを説くものであると考えられる。それでは、この場合の「聖なる真理」はいかなるものであろうか。これは、まさに釈尊によってその「正覚」の根本経験において経験された一真実であった。これは、或る一つの個物に三昧になることにおいて、その個物を突き抜けて、そこに到るという仕方で経験されるところの、その個物と自己と他の一切のものととの時空を超えた真実相、如実相であ



った。(注2) 釈尊の仏教を正しく理解するためには、それが説く根源的なものがこのような仕方  
で経験されたものであるということを認識し、この根源的なものの経験を自らなすということが  
極めて重要であろう。釈尊はこのことに関して次のように説いている。

「聖なる弟子は、法(dhamma 真理)に対する絶対の淨信を具えている、『法は世尊によってよく説  
かれたものであり、現に見られたもの(sandiṭṭhiko)であり、非時間的なもの(akāliko)であり、  
さあ見よというようなもの(ehi-passiko)であり、導引されるようなもの(opanayiko)であり、智  
者たちが各自に経験すべきもの(paccattam veditabbo)である』と。」(S.N.vol.2, 69 「因縁相應  
第41 五怨怖」)

この根源的なもの、「聖なる真理」は、時間・空間的な一切のものがまさに本来それであるところ  
のものではあるが、一切のものと時空とを貫き越えたものであり、あれこれのものではない。  
そこで、原始經典における釈尊の説法では、それはしばしばあれこれの物を表す語とそれを否定  
する語とでもって示されている。その例を挙げる。

「比丘達よ、汝達に真理と真理に導く道とを(saccaṇca saccagamīṃ ca maggam) 説こう。  
これを聴け。では、比丘達よ、いかなるものが真理であろうか。比丘達よ、貪欲の滅尽、瞋恚の  
滅尽、愚痴の滅尽、これが、比丘達よ、真理と言われるのである。では、比丘達よ、いかなるも  
のが真理に導く道であろうか。止(samatho)、これが、比丘達よ、真理に導く道である。

このように、比丘達よ、私によって真理が説かれ、真理に導く道が説かれたのである。比丘達  
よ、他の利益を願っている慈念ある師によって弟子達のためになされるべきことを、私は慈悲を  
垂れて汝達のためになしたのである。比丘達よ、これらの樹下、これらの空閑処で禪定をなせ  
(jhāyatha < jhāyati)。比丘達よ、放逸になることなかれ。後日、後悔者となることなかれ。こ  
れが私からの汝達のための教誡である。」[S.N.vol.4, 369, 無為相應 第15 真理(一) 止]

ここでは、「真理」は、「貪欲の滅尽、瞋恚の滅尽、愚痴の滅尽」、すなわち、貪欲、瞋恚、愚痴  
という煩惱の代表とされるものの滅尽であると説かれている。ここでもこれら三種の煩惱は一切  
の事物の代表として取り上げられているのであり、したがって、この言葉は、しばしば誤解され  
るように、決して煩惱が起きなくなった状態を指し示しているのではない。これが示しているこ  
とは、「真理」は、相を持つ一切のものを貫き越えた無相のものであるということであろう。(注3)

さらに、ここでは、「真理」は、「四つの聖なる真理」の説法やその他多くの説法で説かれてい  
るように、「止」すなわち「三昧」によって到達されるものであることが説かれ、三昧の一種であ  
る禪定(jhāna 禪那、禪)を熱心に実修することが勧められている。

このように、根源的な「真理」は、釈尊の説法ではしばしば現象の否定という仕方で表わされ  
ている。原始經典はこのような表現で満ち満ちているのである。このような仕方で「真理」が表  
現されている原始經典中の説法の言葉をもう一例挙げる。

「世尊は涅槃(nibbāna)に関する法話によって比丘たちに教示し、激励し、鼓舞し、欣喜せしめた。  
彼ら比丘たちは理解しようとし、思惟し、一切の事柄に注意を払い、耳を傾けて法を聴いていた。  
すると、世尊はこのことを知って、その時、この感興語を発せられた。

『比丘たちよ、このような処がある。そこは地もなく、水もなく、火もなく、風もなく、空無辺  
処もなく、識無辺処もなく、無所有処もなく、非想非非想処もなく、この世も他の世もなく、日  
月の両者もない。それを私は、比丘たちよ、来とも言わず、往とも言わず、住とも言わず、没と  
も言わず、再生とも言わない。これこそはまさに住なく、転起なく、縁境なき処であり、これこ  
そ苦の終わり(anto dukkhassa)なのである。』(「小部經典」「自説經(Udāna 感興語)」80頁)

これは「真理」の別名である「涅槃」についての説法である。ここで言われている「苦の終わ  
り」は、たまに「苦の超越」(dukkhassa atikkama)と表わされ、しかし通常は「苦の滅」(duk-  
khanirodha)と表わされるものであり、まさに「真理」を意味しているのである。

### （３）「四つの聖なる真理」の説法の真意

以上のとおり、釈尊の「四つの聖なる真理」の説法は差し当たり次のことを説くものであった。

（Ⅰ）「苦、苦の起因、苦の滅、苦の滅に導く道という四つのものは聖なる真理である。」

（Ⅱ）「苦、苦の起因、苦の滅、苦の滅に導く道という四つのものを聖なる真理と証智する道は三昧である。」

しかし、この場合の「苦、苦の起因、苦の滅、苦の滅に導く道という四つのもの」は、上述のように、一切のものを代表し、一切のものを意味しているものであった。かくして、この説法が真に説いていることは、すなわち、この説法の真意は、次の通りである。

（Ⅰ）「一切のものは聖なる真理である。」

（Ⅱ）「一切のものを聖なる真理と証智する道は三昧である。」

### おわりに — 釈尊の仏教の根本説 —

最初に述べたように、釈尊の「四つの聖なる真理」の説法は、釈尊の最初の説法とされるものの内容にもなっており、ここでは釈尊の仏教の根本説が説かれているものと考えられた。今、この説法は、根本的には、「一切のものは聖なる真理である」と「一切のものを聖なる真理と証智する道は三昧である」とを説くものであるということが明らかになった。そうとするならば、釈尊の仏教の根本説は、第一には、「一切のものは聖なる真理である」ということであり、第二には、「一切のものを聖なる真理と証智する道は三昧である」ということであるということができよう。これは、釈尊の仏教の根本説は一切のものは縁（原因）によって起こっているということを説く「縁起説」であると解する仏教学の定説とは全く異なる見方なのである。

### 注

（注 1）ここで、「仏道修行の目的」という語を用いたのは、次のサーリプッタの答語に拠っている。

『尊者サーリプッタよ、それを目指して沙門ゴータマのもとで仏道修行(brahmacariya 梵行)が修せられるところのものは何であろうか。』『友よ、苦の遍知という目的(dukkhassa parinñattham)を目指して世尊のもとで仏道修行が修せられるのである。』（S.N.vol.4, 253 「ジャブカーダカ相応 第4 何であろうか」）

（注 2）禅者道元(1200-1253)は、「真理」を「仏性」と呼んで、この根本経験を次のように表している。

「この山河大地、みな仏性海なり。・・・恁麼[イモ = そう]ならば、山河をみるは仏性をみるなり。」（道元著『正法眼蔵』大久保道舟編 1971 筑摩書房 17 頁「仏性」）

（注 3）禅者今北洪川(1816-1892)はこの「真理」を次のように説明している。

「それは相(かた)がなく、従って広く行きわたって至らざる処がない。あらゆるものに行き渡っているから実在である。実在でありながら相がなく、無相でありながら実在する。天地を照らして余す処なく、あらゆる方面に行きわたって欠けることがない。その本質の透明、働きの靈妙は、小さな人知では思い測ることもできない。」（今北洪川著『禅海一瀾』盛永宗興訳 柏樹社 78 頁）

### 参考文献

- ① “SAMVUTTA-NIKĀYA” Vol.1～5, The Pali Text Society (London), 1970～1976
- ② “UDĀNA”, The Pali Text Society (London), 1982
- ③ 『仏教学序説』 山口益、横超慧日、安藤俊雄、船橋一哉著 1961 平楽寺書店
- ④ 『仏教要語の基礎知識』 水野弘元著 1972 春秋社
- ⑤ 『禅海一瀾』 今北洪川著 盛永宗興訳 1987 柏樹社
- ⑥ 『正法眼蔵』 道元著 大久保道舟編 1971 筑摩書房

（平成 21 年 3 月 31 日受理）